

[普及事項]

新技術名：酒造好適米新品種「一穂積(いちほづみ)」の育成(平成 30 年)

研究機関名 農業試験場 作物部 水稻育種担当
担 当 者 高橋竜一・川本朋彦 他 7名

[要約]

「一穂積」は出穂期、成熟期が「美山錦」より 1～2 日程度早い酒造好適米である。収量は「美山錦」並。玄米タンパク質含有率が低く、製成酒は淡麗、軽快、後味にふくらみのある特徴を持ち、県内で生産される既存品種とは異なる酒質となる。

[普及対象範囲]

「一穂積」作付け地帯（山間高冷地を除く秋田県内平坦部一円）

[ねらい]

秋田県内では酒造好適米として「秋田酒こまち」と「美山錦」が主に生産されているが、県産酒造好適米品種では全国的に多く醸造に使用されている「山田錦」や「五百万石」が持つような特徴の酒質を生むことができない。そこで、「五百万石」が持つような、淡麗、軽快、後味にふくらみのある特徴の酒質を生む酒造好適米を育成した。

[技術の内容・特徴]

- 1 「一穂積」は「新潟酒 72 号（越淡麗）」を母、「秋田酒 77 号（秋田酒こまち）」を父として秋田県農業試験場において 2001 年に人工交配し、その後代より育成した品種である（図 1）。
- 2 「美山錦」と比較して出穂期は 1 日程度、成熟期は 2 日程度早く、“やや早生”に属する（表 1）。「美山錦」と比較して稈長はやや短く、穂長はやや長く、穂数はやや多い（図 2）。
- 3 いもち病真性抵抗性遺伝子型は“+”であると推定され、圃場抵抗性は葉いもちが“中”、穂いもちが“中”である（表 1）。耐倒伏性は「美山錦」と同程度の“弱”である。耐冷性は“やや弱”、穂発芽性は“やや難”である。
- 4 収量性は「美山錦」並で、玄米の大きさ（千粒重）は「美山錦」より大きく、「秋田酒こまち」より小さい（表 1）。
- 5 「美山錦」と比較して玄米品質が優れ、玄米タンパク質含有率が低い（表 1）。
- 6 製成酒は雑味が少なく軽快で味いに巾のあるタイプとなり、県内で生産される既存品種とは異なる酒質を生む（表 2、図 3）。

[成果の活用上の留意点]

- 1 耐冷性が「秋田酒こまち」よりも 1 ランク弱いため、作付け地域に留意するとともに、減数分裂期～出穂期に低温の場合は深水等に対応する。
- 2 耐倒伏性が「美山錦」並に弱いため、稈長が伸びすぎないように留意する。
- 3 酒造用原料米として使用するため、玄米タンパク質含有率が高くないよう多肥栽培は避ける。

[具体的なデータ等]

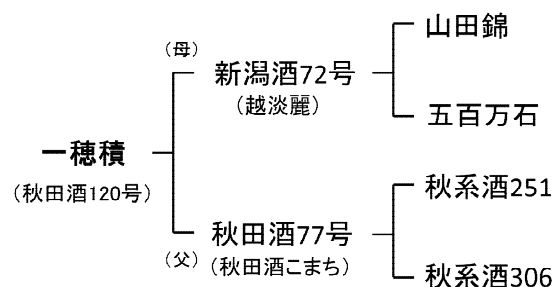


図1 「一穂積」の系譜図



図2 植物体及び玄米写真

表1 「一穂積」の特性一覧

品種名	一穂積	美山錦	秋田酒こまち
早晩性	やや早生	やや早生	やや早生
いもち耐病性			
遺伝子型	+	<i>Pia, Pii</i>	<i>Pia, Pii</i>
葉いもち	中	やや弱	やや強
穂いもち	中	中	中
耐倒伏性	弱	弱	やや弱
耐冷性 (障害型)	やや弱	やや強	中
穂発芽性	やや難	難	やや難
出穂期 (月日)	7月30日	7月31日	8月1日
成熟期 (月日)	9月14日	9月16日	9月17日
稈長 (cm)	80	87	79
穂長 (cm)	20.3	19.7	20.8
穂数 (本/m ²)	375	344	328
倒伏 (0~5)	0.3	0.3	0.1
玄米			
収量 (kg/a)	56.0	56.0	56.7
「美山錦」比 (%)	100	-	101
千粒重 (g)	26.3	24.9	27.2
品質 (1~8)	2.6	3.3	2.7
粗タンパク質 (DW%)	7.2	7.4	7.1

1) 秋田県農業試験場奨励品種決定調査標肥区 (基肥 N 0.6kg/a、追肥 (幼形態) N 0.2 kg/a) 2015~2018年の平均値

2) 玄米の粗タンパク質 (%) は乾物換算で2015~2017年の平均値 (醸造試験場による調査)

3) 品質は1 (特上) ~ 8 (三等下) の8段階評価 (農産物検査員による)

表2 製成酒の成分と官能評価 (醸造試験場)

	一穂積	秋田酒こまち
アルコール (%)	15.4	16
日本酒度	-5	-2
酸度	1.5	1.5
アミノ酸度	1.3	1.3
官能評価 (評点)	1.6	2.7

※2015年、総米40kgで製成

※日本酒度は値が低いほど甘口で高いほど辛口

※アミノ酸度は値が低いほど雑味が少ない

※官能評価値は1 (優良) ~ 5 (劣る) の5段階評価。3人で評価。

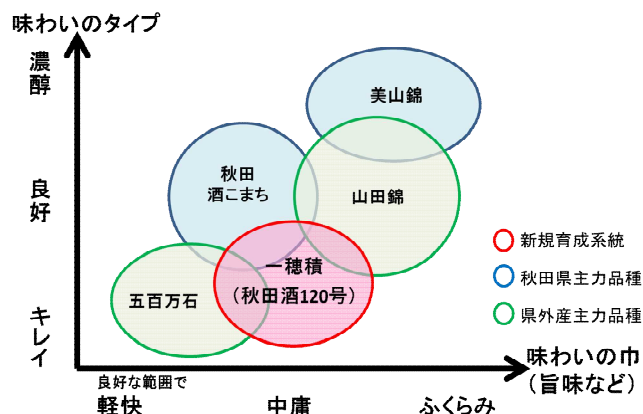


図3 製成酒のイメージ (醸造試験場作成)

[発表論文等]

品種登録出願 2017年10月19日、出願公表 2018年2月13日、出願番号 第32507号
結果の一部は日本育種学会第133回講演会で報告